

杖桑拾葉集

十六

和書門			
八	五	二	
九	四		
三	五		
冊	架	函	號

内閣文庫			
八	五	二	
三	五		
冊	架	函	號

内閣文庫	
番號	和 8552
冊數	35 (19)
函號	204 145



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



扶桑拾葉集卷第十六

目錄

河海抄序

伊勢古碑文多法記

源氏物語提要序

明治十一年四月

源氏物語提要序



源善成

坂士佛

源範政

源氏物語

源氏物語

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



扶桑拾葉集卷第十六

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光國編集

河海抄序

源善成

光源氏物語の寛弘のころのまゝに康和の
すゑのころのまゝにけつりたり代りたりを
ものろしてそゝろくればたゞかたはら
中納言定家公の難義と短して奥入也
か海軍大監の光朝の家これ傳と抄とく水原
と名村ありと河原のそにわす伏見伝流
しかりあり河海と名をよみてまゝと

卷十六

七

めく。福徳乃のちらす家と何くうをせら後法能
 嗣院師位乃うのめ彼梨壺乃奇伝一の世
 く百葉集とよみとて一則とらうと後うお
 思戸乃人叔と定て大中四帖と傳とる御わ
 里一に先師忠守羽長七乃流の産れんはら
 めく。九のまの撰本意とてうらとらに願同
 何つう申て志とく秘伝と藝一とらにま
 一おまわつじとら申れす志とらとてま
 推克良信乃凡とてまといの一とら箱の甲桂
 とつ道とまとい一青より推ととれわらと
 とらぬとい海といままてふと申の袖の産れと

らぬお家とてふとす続く。しとらとら
 何とまそびらんとと何とらんと此これ及
 中葉れ林一何そらくりびくゆとあらとら
 り。前徳乃海とてみとらと海と定むとら
 一といぬのねのん一とあといと葉とらら
 一といと軒とれ獲乃平といとすくつとら
 一といと何とてか巻と決と名付くは海抄と
 一といとらの家乃書とていつのと枝乃書とら
 一といとら。海とて寒くたら何とけとら
 一といとら。故と温とてら一といとら。あ
 一といとら。すめくといとら。とら一といとら

志り申

伊勢大神文春訪記

坂士佛

康永元年十月十日阿まりのの比古神宮
 糸指此公さうしつりさく伊勢國安濃津
 とり出り善くゆりしかきよちかそ
 聊見ゆりし人のとめやしつりも
 のらとともみんらんともくあま日遠
 ゆりぬさき津きゆえらり浦遠し
 て新き此舟人若月し漕を極泊若
 暁の枕しつりさくゆりさく浪風乃も

さくゆり

風をさくそわのゆりさくまきさく
 うらさく浪しぬゆ袖れ

安濃津とあくゆりさく浦とすさゆり
 下しゆわの糖かうさくさくさく
 免よ旅ぬ川らかきとせうかあし
 のつゆさくさくさくさくさくさく
 れさくさくさくさくさくさくさく
 ゆりさくさくさくさくさくさく
 としつりさく小野古ゆ渡さくさく
 さくさくさくさくさくさくさく

卷十六

四

ゆつゆつうもゆつゆつぬ道を緒うりゆつ
らまゆつゆつ松風のききゆつゆつ
のもゆつゆつ遠より入海ゆつゆつ
かゆつゆつ旅の人の体せよゆつゆつ
さゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ

渡口無船憩樹陰

漁村煙暗日沈沈

寒潮歸去途程近

又有松濤驚客心

西へゆつゆつ日新ゆつゆつ

云

ゆつゆつのゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつのゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
死のゆつゆつ海ゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ

海ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ

松田河校殿ゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
中のゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ
ゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつゆつ



子本魏本此星霜とくくふ後一子余廻
 の月法めすとりくとも官若鳥若たる定
 務りくくふけあいまこ二十年の地め
 何りく肉田の勢強とらくこやとる終し
 造營の延りともとりあつた九月申一
 山口余もくくくくくくくくくくく
 煥もきとらりのくくくくくくくくく
 以余徳の好沢ぬぬと雄略とる神守
 天照古神大坂々余くく勅とくく始ひく
 天照豊受と神と我國くくくくくく
 つきと志りく始くくくく命神託たる起を

養子く始ひくくがとふは口彼みことと
 丹後の國く下向くく神明と伊勢國く
 川くも終と勅定ありくくく別丹後
 國と謝郡く此沼の奥井奥くくくありて
 御遷幸とるくく始むく先大和國
 中とるあよつとせありくく一宿治伊賀
 穴穂宮神二宿治伊勢國於麻神戸神一
 宿治山邊のまは一宿治淡相治本平
 尾興于行宮之ヶ月まくく神事代信
 名難宮く夜々天くくくく神事代信
 以今の世くく豊明と号すく其終る利

たしつゝゆりかとりし。新古語も風情
とよみおかく。愁しし。今素も初あとし
る川

足引之山田原能宮柱廣敷立而天
下高知賜宗廟社稷之皇御神農聖
跡志創者泊瀬朝倉能大御門之敕
最恐久辭定而真奈志峯農白雲能
棚引越志太家山何日母阿良氏伊
勢國沼木郷社宮居奈禮鳥居瑞籬
佐丹奴羅須小茨刈葺宮造玉毛金

毛不飾者四方國有人夫者煩貴事
曾奈岐然者阿禮登母運云荷前宮
之長路赦氏子良毛御母良毛暇波
日日之御膳絶藻瀬須豊宇賀能賣
農神爲之大神酒御贄忍穗井之以
水炊朝旦佐奉饗氏人農三角拍之
常磐仁百官之仕者天業仁不異思
之者八隅知之吾大王能御心能
明久賢久御坐母神之誓登木綿手
襖懸留頼能廣前爾降惠農雨露於

仰而受流。國土能百姓。裳榮管作五穀物。雖置足。戶指勢奴。五百枝杉之。淡緑如不葉。替伊麻勢太御世。

右一首奉讚外宮天照豐受大神歌也

短歌

處女子之友爾別而天原。振籬津久流昔悲聞

右一首奉題豐宇賀能賣神歌也

ひし丹後國の河をこりて女八人下
多あけあひくあきり一人はを翁お
まことく絶多たは天女の中し得る

あとうらうくあて女こしけく
うれさかきりぬあしくされくあま女
あまやうくあてこぬ翁云天女し子れ
し縁うくあては國しり何りくさ
子しきりあまきくさくさくあてか
へきぬま女らしくさくさくあて子さ
かぬ娘又うあまきくさくさくあて
さくさくあてはくさくさくさくあて
一挽を取しきし百病こしきさくさく
うらうくあてさくさくさくさくさく
ほしあてさくさくさくさくさくさく

しきりものちこれ為す女心いふら
らぬゆりなれと若しじつかくそのこ
ころをいひゆかるとに舞うくもゆくも
としも女ら終くしうみく女心いふら
ゆらんしひとし天羽衣しは終く終
ゆらもらうとらういふら東しとゆん
しすとし養育志着しはとれく
託居きらしゆゆしはのし養育とゆ
ゆらもらうとらういふら東しとゆん
しすとし養育志着しはとれく
ゆらもらうとらういふら東しとゆん
しすとし養育志着しはとれく

しきりものちこれ為す女心いふら

天原振離見者霞多地家路麻余伊氏行敷不知聞

い乃天女を神明の遷座のうこの依り
く丹後國よりあまのけりりゆゆり
天女をいふとわらうらあまのけりり

奈久郡云々

題三巻物并氷鏡歌二首

もゆりものちこれ為す女心いふら
ゆらんしひとし天羽衣しは終く終
ゆらもらうとらういふら東しとゆん
しすとし養育志着しはとれく
ゆらもらうとらういふら東しとゆん
しすとし養育志着しはとれく

青帛白帛とてきく神樂とてうらむと始り
 とて。天照太神岩戸と細目とて始り。
 とて。天照太神岩戸と細目とて始り。
 岩戸をと用て。太神をうらむとて。又
 て。あつた。その神をうらむとて。始り。
 あり。神の神をうらむとて。始り。
 代々。天照太神岩戸と細目とて始り。
 第十代の神。天照太神岩戸と細目とて始り。
 おと。天照太神岩戸と細目とて始り。
 て。あつた。その神をうらむとて。始り。
 あ。第十代の神。天照太神岩戸と細目とて始り。

根孫。始り。女を。天照太神岩戸と細目とて始り。
 つり。天照太神岩戸と細目とて始り。
 か。天照太神岩戸と細目とて始り。
 り。天照太神岩戸と細目とて始り。
 年。三月。天照太神岩戸と細目とて始り。
 滋。宮。天照太神岩戸と細目とて始り。
 ち。天照太神岩戸と細目とて始り。
 和。國。天照太神岩戸と細目とて始り。
 精。天照太神岩戸と細目とて始り。
 ら。天照太神岩戸と細目とて始り。
 神。天照太神岩戸と細目とて始り。

名妙理有りとは長履二首の并に生けり
く内外一理志益とほりなほ

千盤振神世不替朝熊之阿波丹建
留瑞籬農水能心毛伊知早久宮居
乎出而有麓阿利曾之上於耀須光
麻志和流塵土之積留山農高照月
由勝而隱奈貴鏡宮者多輔妒句阿
利計梨

短歌

朝熊也豊榮登日影社天津神世之鏡奈利雞禮

朝熊一見浦之いりて地也さるる
ゆいほと一とらうらうらとゆか
さくめしすれうらうらうらりや
あやうきさるる人志と一ゆらうら
こしとらうらと一ゆらうらうら
ゆくほと一とらうらと一ゆらうら
うらうらうらうらうらうらうら
の景色をうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうら
あうらうらうらうらうらうら
あうらうらうらうらうらうら

多くはこゝろをこゝろに依て其の神とて
 小か多神海一も久古神宮御
 高松の前の神なりと申す所なり奉る
 荒のこゝろをこゝろと申す所なり
 川とて河とてのこゝろなり此も神と申す
 から紫入りも白れをこゝろと申す所なり
 一神もこゝろなり此も神と申す所なり
 此の浦より遠くはこゝろと申す所なり
 と申す所なり此も神と申す所なり
 石と申す所なり大流の浦と申す所なり
 一伊勢崎のこゝろなり此も神と申す所なり

小か多神と申す所なり此も神と申す所なり
 河とて河とてのこゝろなり此も神と申す所なり
 から紫入りも白れをこゝろと申す所なり
 一神もこゝろなり此も神と申す所なり
 此の浦より遠くはこゝろと申す所なり
 と申す所なり此も神と申す所なり
 石と申す所なり大流の浦と申す所なり
 一伊勢崎のこゝろなり此も神と申す所なり
 親名の島地りも入りぬ昔もこのかた
 乙橋を盤折もく溪の灣とて申す所なり
 黄葉と申す所なり此も神と申す所なり
 一携て遠くも入りぬ昔もこのかた
 一八幡坊も入りぬ昔もこのかた
 一也の中も入りぬ昔もこのかた

の地景とるんば浦を弁物うり命河
らハ又りしうらむと老ぬり身々
ぬのこころて

老の浪とらうんかぬとあつハ
二足の浦をちとこのまら

坂山をれ道と傳ひりかふ小阿と終ゆ
ふすこと古寺あり安養山とやに也
是ハ西行上人のすもゆぢり舊伝とる
そ三をこゆりちと西刹より青ハ
何十八粒の違ふを眼とくこり名と
菊信よとせりんかこ之十一字れ

の花と流とのうん佛道流りのあ
まりしうとも神の崇敬のうらさ
ゆりりや難波付の梅れ白と神道の
まのあめらはし淡雪の月のを
とこりぬうはる地の状とく
り宮川の舞合とむいぬとく葉う
しうらとせとゆりかたもあ宮の柳友
とい風とまら一寺の僧侶もたはと
と社とくぬよふとて成色
よりりかたもあ宮の柳友
とといぬとまら一寺の僧侶もたはと

とくしつりくありまらるるもあがまねん所
しとわれ系の秋乃ふしけりすんれ
しつらとる浦乃入らまをるんり
まあふ録筆後生りしひく教
幸の道も徳昌しきりとらよ都
のしつりくありまらるるもあがまねん所
とくしつりくありまらるるもあがまねん所
しつらとる浦乃入らまをるんり
まあふ録筆後生りしひく教
幸の道も徳昌しきりとらよ都
のしつりくありまらるるもあがまねん所

あつらあまといふこと記録のきこ
しつらとる浦乃入らまをるんり

源氏物語提要序

源範政

柝はこれありて系院乃河時越前守為時
ら女宗武部書也志るに村と天守乃始之
又弁院選子由親王よりと東門院へせり
るに何れも去れ日のほきしつらとるんり
つら双紙をゆらんとしてせしめ女院乃女
房武部をゆらんとしてせしめ女院乃女
房武部をゆらんとしてせしめ女院乃女

卷之六

大正...

...



